

明治末期の幼稚園



出席者

島	小	相	佐	黒	新	山	徳	池	小	岩	高	中	小	鳥	原	原	菊	司	
沢	林	賀	久	田	庄	村	久	田	山	井	橋	村	沢	居	田	田	池	会	
雅	仲	道	間	光	よし	き	孝	史	田	た	ひ	綾	寿	康	カ	ふ	及		
子	子	子	代	子	こ	よ	子	子	子	か	な	子	子	子	メ	子	の		
(う	(日	(養	(四	(新	(大	(文	(番	(芳	(南	(同	(千	(日	(う	(養	(南	(常	(お	(お	
さ	大	徳	谷	宿	日	京	町	林	山	同	桜	日	さ	徳	千	盤	茶	茶	
ぎ	附	幼	幼	幼	坂	第	幼	幼	幼	同	附	大	ぎ	幼	住	幼	水	水	
幼	属	稚	稚	稚	幼	一	稚	稚	稚	同	附	大	幼	稚	住	幼	附	附	
稚	属	園	園	園	稚	幼	園	園	園	同	属	大	幼	園	幼	園	属	属	
園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園

(敬称略)

明治末期の幼稚園のようすをうかがうために、九月十七日、都内の先生方にお茶の水女子大学附属幼稚園にお集まりいただき島沢先生・小林先生・相賀先生・佐久間先生・黒田先生方をかこんで、当時のようすをお話していただきました。

その際のお話から、当時の幼稚園というものの印象をまとめてみました。

× × ×

当時の幼稚園の子どものいうものは、だいたいにおいて、良家の子弟が多かったようです。そのためか、先生の子どもに対する態度は非常に丁寧であった。特にブルジョワ幼稚園といわれた芝麻布の共立幼稚園においては、子どもは人力車で通い、幼稚園につくと、車夫にだきおろされて、おつきの女中といっしょに挨拶をするというありさまでした。園長先生は、いつも子どもが登園する前に玄関に出迎えており、つくと「よくいらっしやいました」と丁寧挨拶していた程であった。おつきの者は、ぞうりをきちんと揃えて下駄箱にしまい、先生は子どもにつきそって部屋まで連れていき、先生すらも子どもにつかえているといった感じであった。江東にあった東橋幼稚園あたりも、やはり丁寧であった様子で、家庭の豊かな子どもが多く、朝はひとりである子どももあつたが、大部分はおつきの人がついていっしょに登園したよう

でありました。

その頃の先生の様子は、髪は当時流行の二
○三高地型で高く積み上げ、長袖の着物には
かま、ぞうりといういでたちであった。近頃
用いられているうわっぱりというものは、震
災後に使われるようになったものです。母親
はたいいて丸まげに結っていた。子どもは、
女の子は長いおかっぱの髪をして大きなリボ
ンをつけており、長袖の着物にへこ帯を結
び、その上にひふを着て白足袋をはいていた
し、男の子も同様に着物を着ていました。

このような服装であったから、ゆうぎの際
などにも、遊ぎ室にはうすべりが敷いてあつ
て、オルガンの音に合せて、女の子は両手に
夫々たもとをもってそろりそろりと能のよう
に歩いたもので、今のように活潑に歩いた
り、とんだりねまわったりすることは全く
しなかった。男の子も、女の子といっしょに
静かにしていたものであり、だいたいにおい
て今のように騒ぎまわったり、いたづらをす
る子はいなかったようでありませう。ゆうぎは
大むね手先だけを動かしてするものであつた

が、かごめかごめとか、ずいずいずつころば
しなどのわらべうたは、その頃からあつて、
現在使われているものと殆ど変っていないよ
うであります。

保育室の様子は全く小学校的な形態であつ
て、教壇はなかつたが、二人ずつの机が二列
に前むきにきちんと並べてあり、部屋の隅に
オルガンがおいてあつた。壁には裝飾的な意
味で既成の額がかけてあり、子どもたちの作
品をかざることとはしなかつたのです。

内容的に見ても、幼稚園の一日は小学校に
似ており、時間割がたててあつて、一五〇二
〇分位の単位の時間が一区切りで、種々と先
生の計画に沿って行われるようになってい
た。その計画は殆んど主任の先生に任せられ
ていたようであります。

かりに幼稚園の一日を眺めてみると、先ず
朝の「会集」によつて始められていたと思わ
れる。子どもたちは机のところにきちんと並
んで、「おはようのうた」をうたつた。

「おはようのうた」

先生おはよう

皆さんおはよう

今日も楽しくあそびましょう

それから一日の始めに注意したいことを、主
任の先生が三〇五分話すのであつたが、話の
内容は、例えば言葉遣いについてなどで、修
身の時間のような教訓的なものが大部分であ
つた。その後唱歌の時間となつてうたをうた
つたが、当時のうたは言葉が難しく、耳から
きいただけでは大人でも意味のとりにくいと
ころがある程でありました。従つて歌詞が難
しいから一つのを長期間使っていました

「べんけいのうた」

天下の名器に逢わばやと

よなよな五条の橋に出で

五百九十九本目の

太刀はべんけいのうすみどり 云々

くさり

つなげやつなげや手と手のくさり

つないでくぐれよ わの中を

くぐらばやがても……………となる

まなべやまなべ みことのままに

つとめやつとめたゆまず うまず云々
うたの時間がすむと全員外に出て、ブランコ
とか砂場などで二〇分位あそび、次の時間が
来るとチリンチリンと合図の鐘がなって、集
まって部屋に入り、その日の予定された仕事
にとりかかるのであった。仕事の内容は主と
して積木・板並べ・折紙などであつて、一週間
の予定が重ならないようにたててありました。
一例えば積木をするときには、二人ずつ並ん
だ椅子に腰かけた子どもたちは、当番が戸棚
から出して来て皆に配るのをおとなしく待っ
ていた。当時の積木は恩物を使用していたの
であり、一人分ずつ一つの箱におさめてあつ
た。幼稚園によっては、一組の中に年長児と
年少児とのいる複式の組編成をしており、そ
の場合は年令によって異なつた積木を使つた
ものである。積木の取扱いは非常に丁寧に
大切に扱い、箱から出すにも一定の作法があ
つて、先生の号令に従つて一斉に行なつたも
のである。皆が積木を出揃えると、先生が
「家（或は汽車など）をつくりましょう。」と
テーマを与えて作らせた。また次に「好きな

ものをおつくりなさい。」といつて、先生はま
わつて見て歩いて、子どもたちの工夫して作
つたものをほめてあげ、一定の時間が経ると、
積木をもとの通り箱におさめるのであります
が、それにも順序があるのであつて、このか
たづけはなかなかむずかしく困難な仕事であ
つた。出来ない子どもが三〜四人残り、先生
が手伝つてあげてしまふ間、他の子どもたち
はいたずらもしないで静かに待つていたもの
だそです。

一日の中に予定される仕事はその他に豆細
工・織紙・南豆玉とおし・ぬいとりなどがあ
つて、技術としては幼稚園の子どもにはかな
り高度なものも多かった。これらの保育の準
備のために、先生は毎日子どもが帰つてか
ら、その用具を取揃えるためにいそがしく、
先生たちが帰るのは八時〜九時になつてしま
うことが多く、部屋の裝飾などにはなかなか
手がまわらなくて、せいぜいわつなぎなどを
してかざつておいた程度でありました。
更に子どもたちの使つてゐる帖面なども、
きれいにきれいに仕上げるのが、その頃の目

標であつたので、先生が手を加えたりして仕
上げたものを家庭にわたしてしまつた。当時
は今のようない自由画帖といつたものはなく
て、普段は石板石筆などを使用してしまつた。
その頃多くして聞かせたお話はイソップと
か日本の五大童話などでありましたが、ある
時、新聞の記事について話したために、小さ
い子どもに世の中のことを話すのは行きすぎ
だと批判されたというエピソードは、当時の
風潮の一端をのぞかせるものではないでしょ
うか。今の子どもの非常に楽しんでみる
紙芝居は、明治末期の幼稚園にはまだなか
つたが、それに代るものとして、三〜五枚程度
の掛図をもつて、桃太郎とか、うさぎとかめ
の話などをして聞かせたものである。この掛
図は市販されており、先生がつくるというこ
とはしなかつた。このようなものを作る余地
のない程、先生たちは翌日の仕事のための準
備に追われていたようである。

更に、先生が子どもにつかえてゐるという
感を深くするのは、おべんとうのときの様子
である。当時は木（またはせともの）の重箱

に入れてもって来ていましたが、共立幼稚園あたりでは、たいていあとから届けられたそうです。重箱の他に茶碗

えをして、御飯を茶碗につけてあげたり、たべさせてあげたりした。先生が子どもといっしょにおべんとうをいただくということはなくて、子どもだけ大事に先に食事をさせてから、先生は交替でどこかの隅で大きいそぎで食事をしました。または、子どもが帰ってしまつてからいただいたものであります。そしてその頃は、先生たちの部屋、職員室というのはなかったということです。

このように昼間は丁重に子どもにつかえ、子どもを帰してからは夜になるまで、追われるように、翌日の用意を整えるためにいそがしかった先生たちは、初任給は六〜八円だったといわれます。今にすればどの位に当るものでしょうか。

明治の末期から現在までには随分世の中もうつり変わったが、幼稚園も変わった。その頃の幼稚園の状態を、当時を知らぬ者にもわかる

ように詳しく話していただけたことは、現在保育にたずさわる身にとりまして、本当に有難く感銘深いものであった。最後に当時うたわれていた天長節のうたを、島沢先生・小林先生・佐久間先生・黒田先生・相賀先生方には思い出してうたっていただき、高橋先生には譜にうつしていただいたが、それを次にのせてこの項の結びとしたい。

天長節のうた

きょうは十一月三日の朝よ

朝日にかがやく日の丸の

国旗はかどなみ ひいらひら

国旗はかどなみ ひいらひら

今は十一月三日の昼よ

おかでも海でもいさましく

打ち出す祝おう ドンドンと

打ち出す祝おう ドンドンと

(お茶の水大附属幼稚園)

お茶の水女子大学附属幼稚園内
幼児教育研究会編

幼児の劇あそび集

A5判 270頁
頒価 220円

お茶の水女子大附属幼稚園において実際子どもたちがよろこんであそんだもの二十数種をおさめたものです。

(本書のお申込みはお茶の水女子大附属幼稚園又はフレーベル館にてお取次ぎいたします)